

令和4年度「体験の風をおこそう」運動推進事業
チャレンジキャンプ
夏の挑戦



1. ねらい

- ① 日頃の生活では体験できない活動を通して、挑戦すること、つながること、感謝することを体感し自己肯定感を育む。
- ② 自然体験や地域でのお手伝い等を通じて主体性や社会性を培い、仲間との信頼関係を築く。
- ③ 「早寝早起き朝ごはん」国民運動を通じた基本的生活習慣の確立を図る。

2. 実施日

令和4年8月13日(土)～8月20日(土) 7泊8日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 募集定員

18名 / 18名

5. プログラム (要約)

このキャンプは、子どもたちが7泊8日をかけ「地域でのお手伝い」、「キャンプ場での生活」「曾爾の山への登山」に取り組むものである。小中学生が、日頃できない自然体験や地域でのお手伝いに主体的に取り組む中で、自己を見つめなおす。友達と協働して活動に取り組むことにより社会性を培い、新たな仲間との信頼関係を築く。また基本的生活習慣の確立を図りながら、挑戦、つながる、感謝する心を学び、自己肯定感を育むことをねらいとするプログラムとした。



日	主なスケジュール
13日	はじめましての日 国立曾爾青少年自然の家 (集合) ・はじまりの会 ・野外炊事 (カレーライス) ・グループT I M E (目標設定) 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (さかな棟)
	農業・林業体験 (お手伝い) の日 A 班: 村内の畑にて小松菜収穫のお手伝い B 班: 自然の家キャンプ場にて林業体験 (薪づくり) 動植物教室・フィールドワーク 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (キャンプ場常設テント)
14日	農業・林業体験 (お手伝い) の日 B 班: 村内の畑にて小松菜収穫のお手伝い A 班: 自然の家キャンプ場にて林業体験 (薪づくり) レクリエーション大会 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (さかな棟)
	出発の日 国立曾爾青少年自然の家⇒赤目四十八滝キャンプ場 野外炊事 (すき焼き等) 【宿】赤目四十八滝キャンプ場
15日	休養日 ソロテント設営 赤目四十八滝周辺散策 野外炊事 (煮込みハンバーグ等) 【宿】赤目四十八滝キャンプ場
	自然の家に戻る日 赤目四十八滝キャンプ場⇒済浄坊の滝⇒国見山 ⇒住塚山⇒屏風岩公苑⇒国立曾爾青少年自然の家 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (さかな棟)
16日	最後にみんなで過ごす日 使用物品の片付け 野外炊事 (回鍋肉・餃子等) キャンプファイヤー 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (さかな棟)
	すべてに感謝!の日 グループT I M E (ふりかえり・冬までにがんばること) 終わりの会 国立曾爾青少年自然の家 (解散)
20日	冬の挑戦へつづく



8月13日 (土) 【1日目】

全国から40人の応募があり、志望動機を基にした選考の結果、奈良県、滋賀県、大阪府、三重県から、小学生5・6年生の18名が自然の家に集まった。不安と期待を胸に、7泊8日を共に活動する異年齢男女混合の1班各6名の3班構成で、「チャレンジキャンプ」夏の挑戦がスタートした。

午前中に始まりの会、オリエンテーションなどを行い、午後から本格的な活動が始まった。

夕食の野外炊事は、「班づくり」をねらいとして行った。緊張していた参加者の表情が少しずつ和らぎ、楽しみながら活動に取り組んでいる様子を見ることができた。グループ TIME では相談を重ね班の目標を作り上げた。一日の終わりに行う「夜のつどい」では、ふりかえりシート「チャレンジカード」を基にふりかえりを行い、一人一人が翌日の活動に向けて意識を高めていた。

8月14日(日)【2日目】

午前中は、参加者を「農業のお手伝い」(A班)及び「林業体験」(B班)の2班に分け、それぞれに活動を行った。

農業班(A班)は、「種の実」の畑に到着後、代表の山下竜一郎さんから作業についての説明を受け、小松菜の収穫・出荷体験を行った。この日は雨天のため、作業に制約があったものの、参加者たちは初めての作業に意欲的に参加していた。



また、林業班(B班)は、自然の家キャンプ場にて林業体験を行った。チェーンソーで自然の家職員が木を伐採し、玉切りをした木を、参加者が鉋で割る活動を行った。切ったばかりの木は水分をたくさん含み、なかなか小さく割ることができなかったが、参加者は苦戦しながらも楽しんで取り組んでいた。



午後からは、自然の家職員による動植物教室及びフィールドワークを行った。自然の家のキャンプ場で自分たちが拾ってきたものや、職員が山で拾ってきた木の実などを実際に手に取り、詳しく観察した。

参加者からは、「植物などの知らないことをたくさん

知れた」「話がおもしろかった」などの感想が聞かれ、楽しみながら活動できていた。

8月15日(月)【3日目】

前日と活動を入れ替えたいうで、同じように2班にわかれて「農業のお手伝い」(B班)及び「林業体験」(A班)を行った。

農業班(B班)は、昨日と同じ山下さんの畑にて小松菜の収穫・出荷体験を行った。この日は天候が回復し、前日よりもビニールハウス内の気温が高かったが、参加者は意欲的に活動に参加していた。

林業班(A班)は、昨日に引き続き自然の家キャンプ場にて林業体験を行った。鉋で木を割ったり、丸太の皮むきをしたりして、楽しみながら活動していた。

二日間を通して、参加者からは「(農作業をして)ふだんできない体験や知らなかったことを知れてよかった」「暑かったり、雨がふったりしたけれど、小松菜を収穫したり、袋に入れたりできて楽しかった」「まきわりで、言葉に表せないくらい力を使った」「林業をみんなと協力しながら楽しめた」といった感想が出ていた。

午後からは自然の家プレイホールにて、班のメンバーとの仲を深めるためレクリエーションを行った。和気あいあいとした雰囲気の中、次の日からの赤目四十八滝キャンプ場での活動に向けて、参加者たちはチームワークを高めていた。



8月16日(火)【4日目】

チャレンジキャンプの山場である、赤目四十八滝キャンプ場への移動の日。参加者たちは早朝から移動の準備をし、ファームガーデンの駐車場から徒歩でキャンプ場へと向かった。

途中、強めの雨に打たれながらも、参加者たちは20kmの道のりを黙々と歩いた。想定していたよりも時間がかかり、けんかをしたグループがあったり足首の痛みで悩まされた参加者がいたりしたが、誰一人としてリタイアすることなく、無事に赤目四十八滝キャンプ場へ到着することができた。

到着後、テントの設営を行う予定だったが、雨脚が強まったため、この日は急遽研修棟で宿泊することになり、テントの設営は次の日に持ち越しとなった。



一日の最後、ふりかえりの時間では「階段や坂道で苦戦したけどはげましあって歩いた」「最後、あきらめそうになったけど、みんなと歩ききった」といった感想が出されていた。



8月17日(水)【5日目】

チャレンジキャンプが始まって初めての休養日。長距離を歩いた疲労を回復するため、ゆったりと過ごす一日とした。赤目四十八滝周辺を散策し、開いている店で買い物をしたり、キャンプ場でトランプをしたりして、それぞれにゆったりと時間を過ごすことができた。

また、前日にできなかったテントの設営を行った。初めは勝手がわからず戸惑う参加者も多かったが、お互いに声を掛け合い、無事に設営することができた。



8月18日(木)【6日目】

登山に挑戦し、自然の家に戻った。朝から雨が降り、撤収作業に思ったよりも時間がかかったが、キャンプ場を出発するあたりから雨がやみ、登山開始のころには晴れ間も見え始めた。

済浄坊の滝から林道を抜け、国見山、住塚山を経て、屏風岩公苑まで6時間余りの道のりを歩いた参加者たちは、疲れた様子ではあったものの、達成感を感じているようだった。

一日のふりかえりでは「山に登ることは大変だったけど、楽しく登れた」「みんなでゲームをしながら歩いて楽しかった」「みんなといっしょに協力しながら歩いた」など、前向きな感想が出されていた。



8月19日(金)【7日目】

朝から天候に恵まれ、テントや寝袋など、雨に濡れたり泥で汚れたりした道具類を、干したり洗ったりした。各自が自分にできることを考えながら作業をすることができ、予定していたよりも早く午前の作業を終えることができた。

作業後に時間ができたことで、昼食までの間ファームガーデンに買い物に出かけることができた。家族へのお土産を買うタイミングがなかなかなかったので、参加者たちは楽しみながら時間を過ごしていた。

昼食後、午前中に干した荷物の片づけを行った。この作業もスムーズに終了し、一日のプログラムを、余裕をもって進めることができた。



ファイヤーを行った。ボランティアたちが会を進行し、いくつかのスタンプをした。曾爾での最後の夜、みんなで炎を囲んで楽しく過ごすことができた。



まだまだ体の小さな小学生にとって、長距離を歩いたり、自分のことは自分でしたりといった活動は、少しハードルの高いことかもしれない。そう思いながらプログラム構成を考えたが、参加者たちはお互いに協力し合い、楽しみながらプログラムをこなしていった。子どもたちの体力や適応力に驚かされた1週間だった。

次は冬の挑戦である。一人一人の思いを受け止め事業を展開していきたい。

(企画指導専門職 福島 茂樹)

8月20日(土)【8日目】

長かった夏のチャレンジキャンプも、最終日を迎えた。前日に道具類の片づけが終わったため、この日は時間に余裕をもって活動することができた。

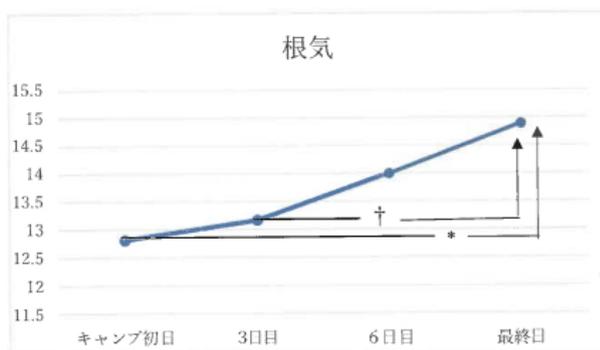
グループ TIME ではこのキャンプで学んだことを模造紙にまとめる活動を行った。その後は、各班でそれぞれ発表の準備を行った。

午後からの終わりの会では、仲間や保護者が見守る中この一週間で学んだこと、気付いたこと、今後の目標等を発表することができた。

冬の挑戦まで、それぞれの場所で目標を持って過ごし、さらに成長した姿で再会することを約束して別れた。

7. 調査結果

「やりぬく力」についてキャンプ前後で比較した。調査対象は参加者と学生ボランティアで、アンケートはキャンプの直前、中間(3日目、6日目)、キャンプ直後の計4回実施した。



調査の結果からキャンプを通してやり抜く力が育まれたことを確認することができた。

8. まとめ

日頃の生活の中でできないことに挑戦する。自分のことは自分でする。様々な活動を通して「つながり」を実感させたい。そのことを念頭に置いて、7泊8日を過ごした。

令和4年度教育事業 チャレンジキャンプ
冬の挑戦



日	主なスケジュール
7日	再会の日 国立曾爾青少年自然の家（集合） ・はじまりの会 ・グループTIME（目標設定） ・登山準備 ・テント設営 【宿】国立曾爾青少年自然の家 キャンプ場
	三峰山登山の日 ・三峰山登山 【宿】国立曾爾青少年自然の家 キャンプ場
9日	すべてに感謝!の日 ・グループTIME（ふりかえり ・これからがんばること） ・終わりの会 国立曾爾青少年自然の家（解散）

2. ねらい

- ④ 日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感を得て、自己肯定感を高める。
- ⑤ 自然体験を通じて主体性や社会性を培い、仲間との信頼関係を築く。
- ⑥ 早寝早起き朝ごはん運動を通じた基本的生活習慣の確立を図る。

2. 実施日

令和4年1月7日(土)～9日(月・祝) 2泊3日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 募集定員

18名 / 18名

5. プログラム（要約）

夏の挑戦をともに過ごした仲間と再会し、新たなチャレンジに取り組む機会とし、厳冬期のキャンプと三峰山における冬山登山を軸とした。新たな挑戦や仲間づくり、自分を見つめる等、キャンプの経験を今後に活かしていくために、キャンプ後の自分自身を思い描く時間をとった。



1月7日(土)【1日目】

6か月ぶりに曾爾青少年自然の家に集まった仲間達。中には緊張した表情を見せる参加者もいたが、すぐに打ち解け、再開を喜び合った。

はじまりの会、オリエンテーション、アイスブレイクなどを行いグループ TIME から本格的な活動が始まった。



昼食後、冬山登山の説明及び準備を行った。その後、キャンプ場にてテントの設営を行った。それぞれのテントで、2泊を快適に過ごすことができるよう場所を選んだり、テント内に冷気が入ることを防ぐ工夫をしたりする姿がみられた。



夕食づくりまでの時間を利用して、三峰山登頂に必要な荷物をまとめたり、アイゼンやスパッツの調整を行ったりして、次の日に向けて準備を進めた。

一日のふりかえりにはほとんどの参加者が「新しい班の子と協力して山に登りきる」、「寒さに負けず山に登りきる」、「みんなで最後まで歩ききる」など、三峰山登山について書いていた。夜のつどいをした後、次の日に備えて、早めにそれぞれのテントにて就寝した。

1月8日（日）【2日目】

活動準備と食堂での朝食を手早くすませ、三峰山へ出発した。



一步一步を踏みしめながら山頂への歩みを進めた。当日の山頂付近はもやがかかり、眺望はよくなかったが、参加者たちは普段あまり見ることのない雪の世界に心を躍らせながら、班ごとに山頂を目指した。

山頂では無事登頂できたことを、仲間同士で喜び合っている様子を見ることができた。下山途中には雪を投げ合ったり、レジャーシートを使って斜面を滑り降りたりして、雪山を楽しんでいるようだった。



夜のふりかえりでは「雪山はとても寒くて道のりはかなり長くて大変だったが、最後まで歩くことができた。」「途中、もう無理と思うことがあったけど、山に登りきることができた。」「通りすがりの人にはげましの声をかけてもらった。うれしかった。」など、前向きにがんばって登山をしたという内容の感想が多く見られた。

1月9日（月・祝）【3日目】

起床後、身の回りの整理整頓をすませ、2日間宿泊したテントや寝袋など、物品の片づけを行った。

朝食後のグループ TIME では、このキャンプで学んだこと、これから挑戦したいことを模造紙にまとめる活動を行った。その後は、各班で工夫をこらしながら発表の準備を行った。

午後の終わりの会では、仲間や保護者が見守る中、このチャレンジキャンプで学んだこと、気付いたことや、これから挑戦したいことを、自信を持って発表することができていた。



6. まとめ

参加者からは「夏も冬も一大イベントはあって大変だったけど、そのおかげでみんなとの仲が深まった気がした。」や「夏は家に帰りたいけど、今は帰りたくない。いい思い出になった。」等の感想があった。

夏と冬のキャンプを通して、自分たちで食事を作ったり、テントの中で寝袋で寝たり、歩いたこともないような長距離を歩いたりして、今までしたことのないことをたくさん経験した。そんな初めてだらけの中でも、参加者たちは楽しみを見つけ、自分たちで試行錯誤しながら行動し、課題を乗り越えていく。子供たちのたくましさを感じることでできたキャンプだった。

（企画指導専門職 福島 茂樹）